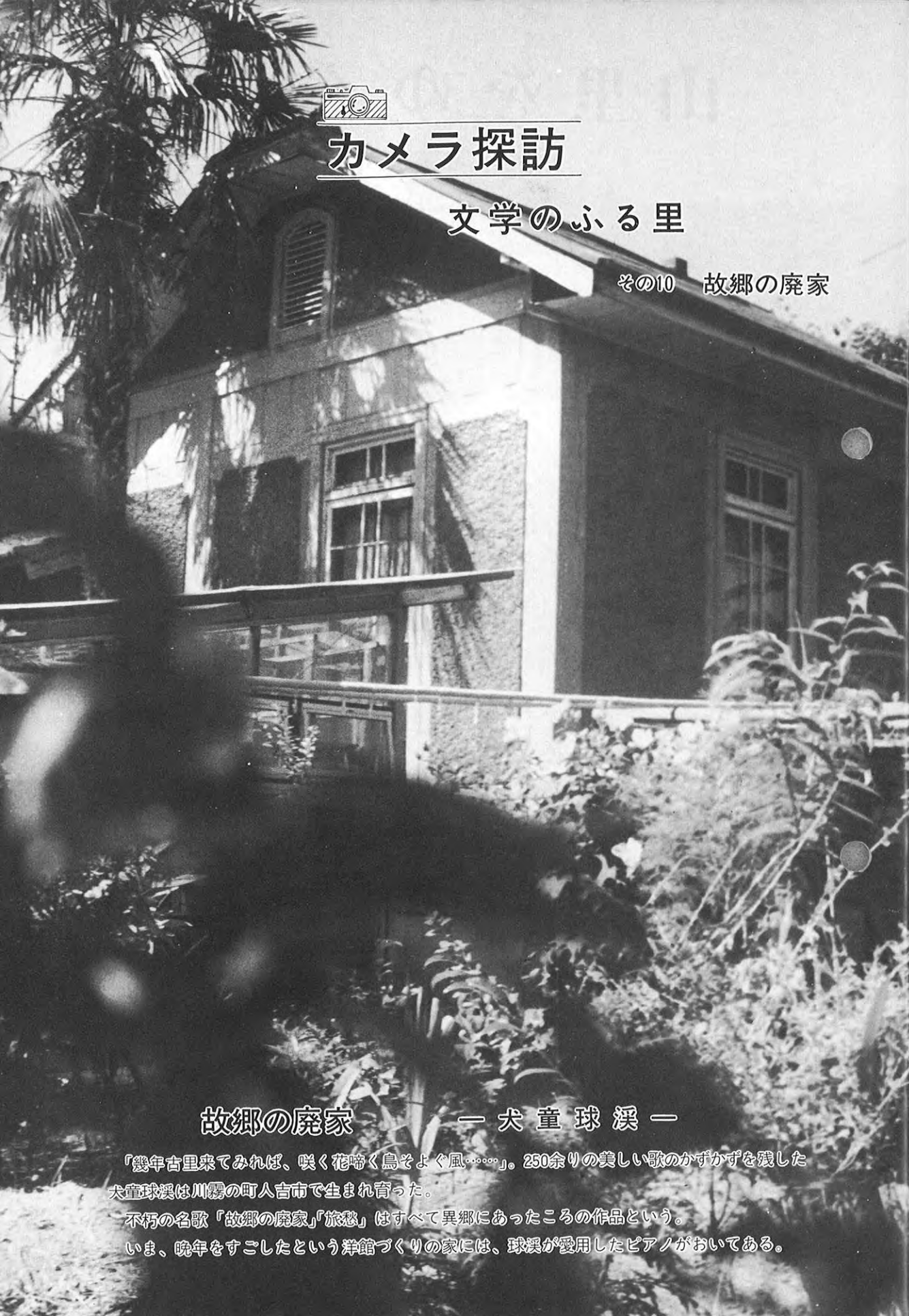




カメラ探訪

文学のふる里

その10 故郷の廃家

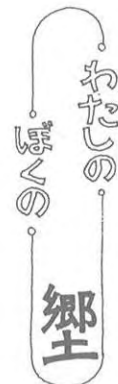


故郷の廃家 — 犬童球溪 —

「幾年古里来てみれば、咲く花啼く鳥そよぐ風……」。250余りの美しい歌のかずかずを残した犬童球溪は川霧の町人吉市で生まれ育った。

不朽の名歌「故郷の廃家」「旅愁」はすべて異郷にあったころの作品という。

いま、晩年をすごしたという洋館づくりの家には、球溪が愛用したピアノが置いてある。



荒尾市立清里小学校 六年 山川茂由

郷土荒尾、ぼくたちの荒尾市は、熊本県の北西端に位置し、北は福岡県大牟田市に、隣接し、南は日立造船の長洲町、西は有明海に面し、雲仙岳、多良岳をのぞみ、東は最高峰五百一メートルの県立公園小岱山という天恵の条件を備えた所です。荒尾市は、先史の昔から幾多の史跡遺跡をのこして、ふめつのれきしをつづけてきたところとききました。

小岱山には、上代製鉄跡、祝部窯跡があり、市内には、古墳や古墳武装石人をはじめとして、細川侯の参勤交代の時の宿舎や、県文化財の岩本眼鏡橋、中国革命で有名な宮崎滔天の生家など多くの遺跡史跡が散在しています。

半農、半漁の寒村にすぎなかった荒尾市は明治三十年、三井鉱山によって石炭が開削されてから、急速に人口が増加し、石炭の町として発展しました。大正八年には町制が、昭和十七年には市制が施行されて繁栄してきました。昭和になって石炭に加えて軍需工場や化学工場が建設されました。しかし終戦と共に姿を消し、今では、その一帯に西日本一をほこる三井グリーンランドや県下にほこる体育館、プールをはじめとする運動公園が整備され、ぼくたちの活動の場として、多くの人からしまわれています。

石炭の町として発展してきた荒尾市は、石炭産業の不振にあえぎながらも、有明臨海工業地帯の一角をにわたっての工業都市、県下はもちろん、外国まで輸出される荒尾梨、貝やのりを中心とする海産物等、農、工、漁の町として躍進を続けています。

春は小岱山の三葉つつじ、赤田湖畔の梨花、夏はプールや潮干狩、秋は小岱山の紅葉狩、冬は湯の里赤田温泉をひかえ、豊かな自然に恵まれ進展する郷土、荒尾、ぼくたちは、ほこりをもって郷土を愛し発展させたいと思っています。